



台湾文学連続講座

フォルモサからの風

フォルモサ——台湾のこと。ポルトガル語で「美しい(島)」の意味

第1回

2015
5/9^土
14:00 ~

朱天心 [作家]

「ここに恐竜あり——台湾文学のいま」

◎朱天心 (Chu Tien-hsin)

1958年台湾高雄鳳山生まれ。台湾大学歴史系卒業。父は作家、母は日本文学の翻訳家、姉も作家という環境のもと、10代より創作活動始める。15歳のとき、小説「梁小琪的一天」でデビューし、その後、新聞・雑誌に小説を発表。大陸出身の父と台湾出身の母を持つ、いわゆる外省人第二世代の女性作家として、記憶・歴史・アイデンティティを問う作品群で注目を集める。『古都』(台湾: 麦田出版、1997; 邦訳、清水賢一郎訳、国書刊行会、2000)で、1997年度中国時報十大好書、聯合報最優秀圖書賞などを受賞。

天野天街 [劇作家・演出家]

「呼吸する字幕——台北公演のこと」

◎天野天街 (あまのてんがい)

1960年愛知県一宮市生まれ。劇作家、演出家。劇団「少年王者館」主宰。名古屋を拠点として演劇、ダンス等、幅広いジャンルの舞台演出を手掛ける。1998年より演劇ユニット「KUDAN Project」始動、『劇終/OSHIMAI〜くだんの件』で台北・香港で初の海外公演を実施。その後も北京、広州、釜山などで上演され、アジア演劇界に大きな衝撃を与える。

第2回

2015
6/6^土
14:00 ~

胡淑雯 [作家]

聞き手 ● 三須祐介 [立命館大学文学部准教授]

「言葉を失う痛み、記憶する難しさ」

◎胡淑雯 (Hu Shu-wen)

1970年台湾台北生まれ。台湾大学外文系卒業。新聞記者、編集者、女性運動団体に専従した時期を経て、現在は作家活動に専念する。台北文学賞、時報文学賞などを受賞。作品には短篇小説集『哀艶は童年』(印刻出版、2006)、長篇小説『太陽の血は黒い』(印刻出版、2011; ※邦訳『太陽の血は黒い』三須祐介訳、あるむ、2015年4月刊行)など。

◎三須祐介 (みすゆうすけ)

1970年静岡県生まれ。立命館大学文学部准教授。専門は近現代中国演劇・文学。翻訳に胡淑雯『太陽の血は黒い』(あるむ、2015)、棉棉『上海キャンディ』(徳間書店、2002)、論文に「明滅し揺らめく欲望—林懷民『赤シャツの少年』を読む」(『野草』90、2012)、「曲から劇へ—上海滬劇社」という経験(『帝国主義と文学』研文出版、2010)など。

第3回

2015
6/27^土
14:00 ~

封德屏 [文訊雑誌社 社長兼編集長]

聞き手 ● 石橋毅史 [ノンフィクションライター]

「台湾独立系書店の魅力ふたたび」

◎封德屏 (Feng Deping)

1953年台湾屏東生まれ。淡江大学中国文学系博士。複数の雑誌社・出版社で200冊近い書籍を編集したのち、1984年に文訊雑誌社に入社。編集主幹、副編集長、編集長を歴任する。現任、文訊雑誌社の社長兼編集長のほか、台湾文学発展基金執行長、紀州庵文学森林館長でもある。長年にわたり雑誌『文訊』の編集長をつとめ、全国的な会議やイベントの準備にも携わる。また『台湾文学年鑑』『台湾作家作品目録』『台湾現代作家研究資料集編』などの編集責任者となるほか、『張秀亞全集』『艾雯全集』の編集企画もおこなう。

◎石橋毅史 (いしばしたけふみ)

1970年東京都生まれ。日本大学芸術学部文芸学科卒業。出版社勤務を経て、出版業界専門紙「新文化」編集部へ。2005年「新文化」編集長、10年よりフリーランスとなる。著書に『「本屋」は死なない』(新潮社、2011)、『口笛を吹きながら本を売る—柴田信、最終授業』(晶文社、2015)など。現在、注文出荷制出版社による共同DM「今月でた本・来月でる本」にて「本屋な日々」を連載中。



会場 ちくさ正文館本店 2F

定員 ● 各40名(入場無料・先着順・通訳あり)

名古屋千種区内山3-28-1 Tel: 052-741-1137

JR中央線千種駅・地下鉄東山線千種駅4番出口より徒歩3分

主催 ● 愛知大学国際問題研究所 共催 ● あるむ 協力 ● ちくさ正文館本店 / シマウマ書房
後援 ● 台湾文化省 / 台北駐日経済文化代表処・台北文化センター 特別賛助 ● 伊衍樑
お問い合わせ ● 愛知大学国際問題研究所 e-mail: kokken@ml.aichi-u.ac.jp (担当: 田中)
あるむ Tel: 052-332-0861 e-mail: arm@a.email.ne.jp (担当: 吉田)

文化部
MINISTRY OF CULTURE, TAIWAN
台湾文化光点計画